

ぎよくりゅう

玉龍と朝鮮

郷土の日本画家・徳田玉龍 part4

徳田玉龍（1883～1958）は、朝倉市出身の日本画家です。未だ知られることの少ない画家ですが、朝鮮半島の金剛山や日本の富士山など、厳しくも美しい霊峰の姿を数多く描いています。

甘木歴史資料館では、平成26年に遺族から作品や関係資料を寄贈いただいたことを機に、毎年企画展を開催し、玉龍の紹介に努めてきました。4回目となる今回は、「玉龍と朝鮮」と題し、画業の中軸をなす金剛山を描いた作品に注目します。彼の生涯と作品とをたどることを通じて、激動の時代を精力的に生きた画家の魅力に触れていただきたいと思います。

『画歴』にみる画家の生涯

玉龍は、明治16年（1883）、甘木本町（現在の朝倉市甘木）に、徳田清三・トミの三男として生まれました。名前は清七郎。晩年に自ら記した履歴書『画歴』によれば、川端玉章・村瀬玉田に師事して円山四条派を学び、22歳で東京の展覧会で評価を受けます。その後、耶馬溪を巡り、福岡・大分・山口で個展を開催します。

明治43年（1910）、27歳の時に朝鮮に渡ります。そこで金剛山に魅かれて山籠研鑽を決意し、玉龍窟と名づけた窟に3年籠って絵を描いたと言います。『画歴』には、金剛山を描いた作品が李王家や朝鮮総督府、鉄道会社や銀行の要人に買い上げられ、朝鮮・中国・日本で盛んに個展を開催したことが記されています。

昭和21年（1946）に帰国。その後は富士山を探勝し、晩年には二男が住む吉井町（現在のうきは市吉井）に隠居。

そこで《富嶽百景》の制作に取り組み、10巻に及ぶ画卷を完成させました。そして秩父宮妃の台覧を仰ぐべく上京しますが、病を得て帰郷、昭和33年（1958）に吉井にて亡くなりました。享年74歳。《富嶽百景》は宮家によって装丁され、彼の死後に遺族の元へ戻りました。



徳田玉龍《金剛山萬物相玉女峰》



徳田富次郎《外金剛・玉女峰頭》

朝鮮金剛山を描く

玉龍が朝鮮に渡ったのは、日韓が併合され朝鮮総督府が設置された直後のことです。そこから終戦までの30年以上にわたり、日本や中国を往来しつつ、玉龍は活動の中心を朝鮮に置きました。そこで出会ったのが金剛山。雄大な山容は画家を圧倒し、生涯を通じて取り組む重要な画題となりました。

金剛山は、現在の北朝鮮の南東端に位置する山塊です。古くから名山とされ、19世紀末には世界的に知られるようになりました。広大な山中は、内金剛・外金剛・新金剛・海金剛とに区別されて名所化し、日本からも多くの文人や画家、観光客が訪れました。

ここで玉龍は、山中を探勝し、窟に籠って絵を描いたと言います。彼の作品には、花崗岩の奇岩や連続する瀑布など、実在する景勝地を分かりやすく描いたものが多く、金剛山に深く親しんだことが分かります。

注目されるのは、玉龍の兄・富次郎が撮影した写真との共通性です。富次郎は朝鮮で写真館を経営しており、大正から昭和にかけて、金剛山を紹介する写真集を多数刊行しています。玉龍の絵画の中には、富次郎の写真とモチーフや構図が近似するものが数多くあります。また、富次郎の写真集に玉龍の絵画が掲載されることもあり、二人の活動は密接に関係していたことが窺われます。

兄弟が活躍した時期は、折しも金剛山の山麓に鉄道や道路が整備され、山内に温泉旅館やスキー場が設けられて、一大観光地へとなくなっていく只中にあります。富次郎が経営した徳田写真館は、最盛期には元山府の本店に加えて、外

金剛温井里に支店、内金剛に分店があり、他にも温井里で旅館や貸家、リンゴ園などを経営していたと言います。金剛山の開発が進み、日韓併合によって多くの日本人観光客が増える中、写真家と画家の兄弟は、手を携えて金剛山を舞台に活動したのでしょうか。

《玉龍窟》に描かれた世界

数多くの金剛山を描いた玉龍ですが、《玉龍窟》は、山への愛情と憧れがとりわけよく示された作品です。彼が山籠して絵を描いたと言う玉龍窟は、新金剛の山中にありました。雪の朝には窟の周りに虎の足跡が残り、李王家からはいつも沢山の酒壺が届けられていたと、後に彼は孫達に語って聞かせています。

画面では、画家の住まいは折り重なった岩々の狭間にあります。窟内の建物ではオンドルが暖かい火を宿し、入口の岩肌には「玉龍窟」との文字が彫り込まれていて、ここが画家の居所であることを静かに主張しています。



徳田玉龍《玉龍窟》

周囲には豊かな水流をもつ溪谷、背後には切りたつ岩山が見えます。丸い巨石を頂く特徴的な岩は、外金剛の鬼面岩で、その横に描かれるのは新金剛の十二瀑布。遠くに見える海は、海金剛でしょうか。いずれも実在する景勝地ですが、ひとつの視点から見通せるものではありません。ここに描かれた景観は、実景そのままではなく、画家の豊かな構想力によって一画

面に集約された、壮大な金剛山世界なのです。

盛りだくさんのモチーフを、玉龍は、前景・中景・後景とに配置し、安定した構図をつくりあげています。また、柔らかい筆致と、暖色を多用した薄塗りの色彩によって、明るくさわやかな空気感を描き出しています。水平線から昇る朝日と舞い飛ぶ鶴も、画家が住まう世界を寿ぐようです。理想郷としての金剛山が、明るく穏やかに描き出されていると見る事ができるでしょう。

当館に寄贈された作品や関係資料によって、徳田玉龍の生涯や作品は少しずつ明らかになってきています。しかし、まだ調査や研究は始まったばかりです。

朝鮮に残したであろう絵画はまだその存在を確認できておらず、また現存する作品の制作年代も判明しないことがほとんどです。今後は、継続した調査や落款や印章の分析を通じて、これらに迫ることが必要と考えています。また、写真家の兄・徳田富次郎の存在も、玉龍の活動を考える上で改めて注目されます。

明治・大正・昭和の激動の時代、朝鮮に渡って活躍した玉龍の存在は、この時代の画家活動のダイナミズムを示してくれることでしょう。
(國生知子・中川満帆)

『画歴』にもとづく徳田玉龍略譜

明治 16 年 (1883) 甘木本町 (現朝倉市) に生まれる

川端玉章・村瀬玉田に師事し、円山四条派を学ぶ

明治 38 年 (1905) 日本美術協会・日本画会展覧会に出展

明治 40 年 (1907) 甘木龍泉池大広間にて個展を開催

明治 42 年 (1909) 耶馬溪を探勝し、個展を開催

明治 43 年 (1910) 朝鮮半島へ渡る

明治 44 年 (1911) 金剛山に登り山籠研鑽を決意

大正 1 年 (1912) 内外金剛山を探勝する

大正 2 年 (1913) 新金剛の十二瀑布を描くため玉龍窟に籠る

李王家・朝鮮総督府・朝鮮陸海軍などから作品買上
朝鮮・中国・日本で個展を開催

昭和 21 年 (1946) 天津から高砂丸にて引揚げる

昭和 22 年 (1947) 富士山を探勝する

昭和 25 年 (1950) 秩父宮に拝謁、金剛山・富士山の作品台覧

昭和 26 年 (1951) 吉井町 (現うきは市) 二男宅に隠居
《富嶽百景》を描き始める

昭和 29 年 (1954) 《富嶽百景》全 10 巻が完成

昭和 30 年 (1955) 秩父宮妃台覧のために上京するも、病を受けて帰郷

昭和 33 年 (1958) 吉井町 (現うきは市) にて世界



Amagi Historical Museum

◆発行日：平成 31 年 1 月 5 日

甘木歴史資料館

◆住所：〒 838-0068 福岡県朝倉市甘木 216-2

◆TEL/FAX：0946-22-7515

◆<http://www.city.asakura.lg.jp/ama-reki/>